イザヤ2章1-5節

「主の光の中を歩もう」

アドベント第一主日に与えられたのは、イザヤ書からの御言葉です。イザヤが預言者として召されたのは、紀元前 740 年頃と考えられています。イザヤが預言者として召されてから 40 年。今までイザヤは、「人に頼るな。偶像に頼るな。神の民として、生ける神にのみ頼れ。」そう語り続けてきました。しかし、人々はイザヤの声に耳を貸すことなく、アッシリアが台頭すればこれに頼り、アッシリアが攻めてくればエジプトに頼りました。そのような状況の中、イザヤは神さまから一つの幻を与えられました。それが今朝与えられている御言葉です。

イザヤが与えられた幻は希望に満ちていました。それは「終わりの日」の幻です。2 章 2～3 節の幻は、世界中の人々がエルサレムに大河のように続々と集い、神様の言葉、神様の教えを聞くようになるというのです。イザヤが告げているのは「終わりの日」の幻です。私たちは、この「終わりの日」が始まっていることを知っています。イエスさまが既に来られたからです。そして2章4節は、よく平和聖日などでも読まれる箇所です。神が争いの根を断ち切られる、というメッセージです。従って、戦いのための武器は必要がなくなるのです。これが主の与える喜び、慰めです。主の裁き、戒めは、争いに用いる武器である剣を打ち直して鋤として、「国は国に向かって剣を上げない」平和な時代をもたらせられるというのです。この戦争はいつまでも続くものではない。必ず平和が来る。主の平和が来る。そのことを自分の心に刻むように、自分に語るように、そうされたのだと思うのです。

しかしながら、主の平和は、そのような世界をまだ私たちは見ていません。残念ながら、クリスマスの時に天使が「地には平和」と歌った「平和」はまだ来ていない。しかし、その平和はもう始まっている。イエスさまが来られたことによって始まっている。まだ完成してはいないが、必ず完成する。そのことを私たちは信じている。それが、イザヤが 5 節で告げた「主の光の中を歩もう」ということです。光はこの終わりの日から射し込んできます。国も民族も、男も女も、文化も、生まれも、社会的立場も、富んでいる人も貧しい人も、障害のある人もない人も、老いも若きも、一切の壁が取り除かれ、互いに愛し合い、支え合い、仕え合う世界が来る。必ず来る。イエスさまが再び来られて、その世界が実現される。それがいつなのか、私たちには分かりません。しかし、その日が来ることを信じて私たちは生きる。その日を信じて、教会は歩み続けてきましたし、今も歩んでいます。その日に向かって、その日に備えて、為すべきことを為して一日一日生きる。クリスマスに向かって一日一日を歩む私たちは、この希望に生きる者の姿、そのものなのです。

主に一度捨てられた民に向かって、「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。」と預言者は呼びかけています。「主の光に歩む」とは、神の御言葉に従って生きるということです。イスラエルは神の御言葉を聞くよりも、世の中のことを優先し、異邦人のように、人が造った物を拝んでいました。その罪を悔い改めて、主の道に歩もうではないか、と言うのです。主の教えが語られるヤコブの家とは、御言葉が語られ、御言葉が聞かれる礼拝が守られる場所です。主を礼拝し、主の御言葉を聞く生活、これこそ「主の光の中を歩む」生活です。そうするなら、わたしたちは終末に生きる民として、その使命を果たすことができるのです。今日から、待降節アドベントが始まります。平和の君、イエスさまを心からお迎えいたしましょう。